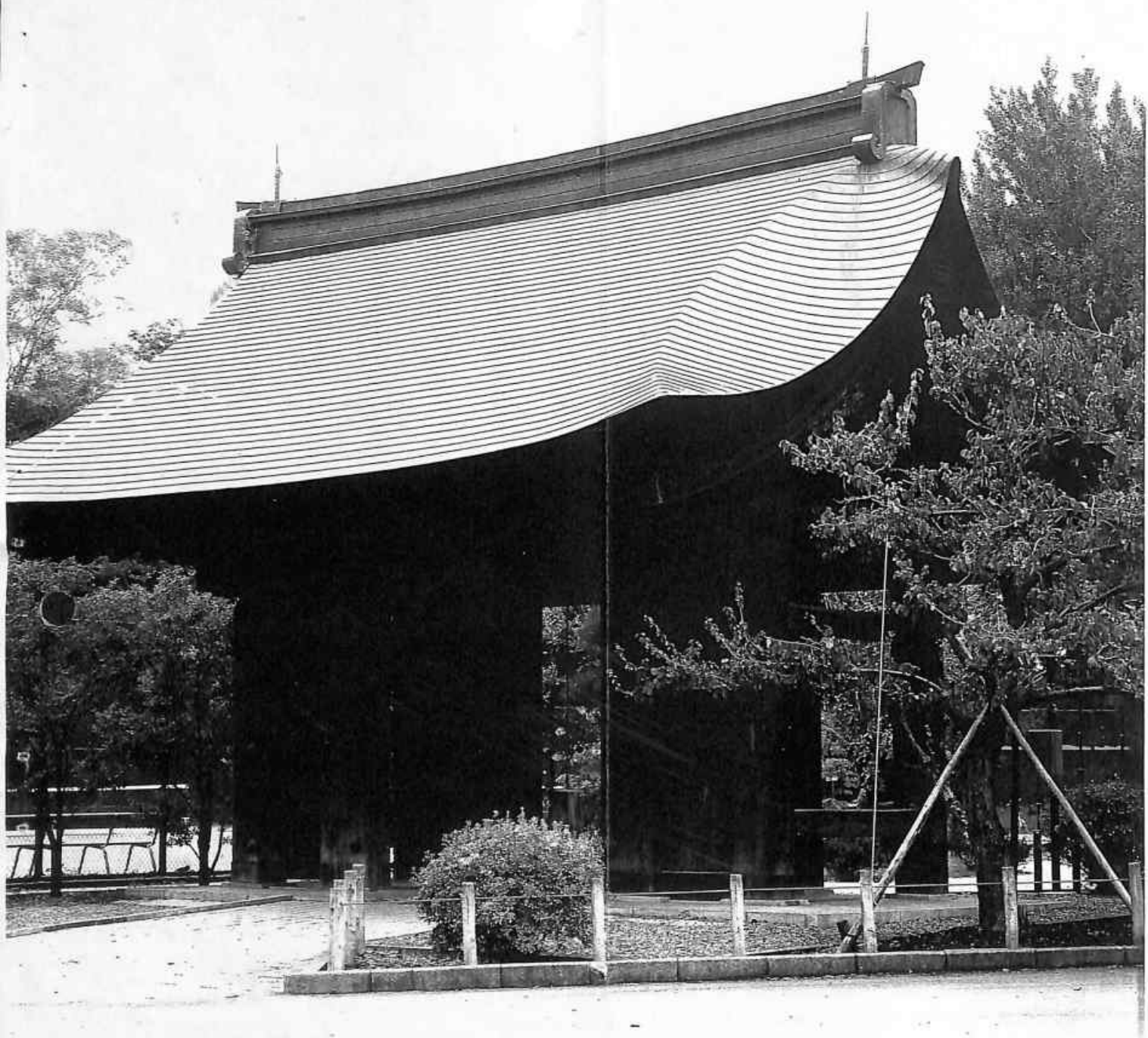


城、史跡OB会「水戸城と借楽園の梅まつりを歩く」

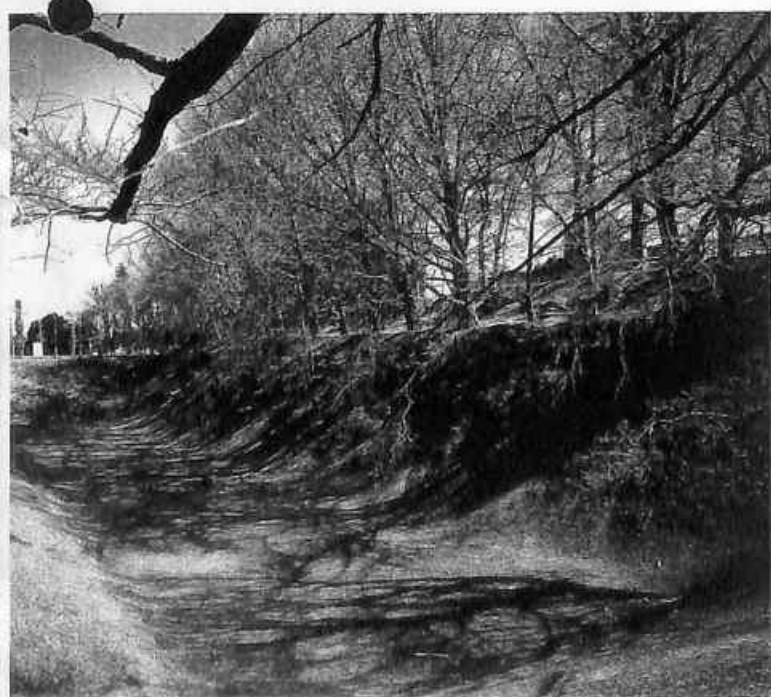
- ①平成17年3月12日(土曜日=予備日15日)
- ②青春18切符3組(15人)
- ③行程(15日の場合、南船橋発以降若干変わります)
八幡6時48分(京葉快速)南船橋7時13分着、16分発
新松戸39分着、44分発、柏51分着、8時04分発
借楽園臨時駅9時36分(15日の場合は水戸38分着バス移動)
- ④見学コース(変更することがあります)
水戸借楽園(電車までは徒歩移動)弘道館、水戸城



JR水戸駅にある黄門一行の銅像
水戸黄門(徳川光圀)が助(すけ)さん、格(かく)さんの供をしたがえ、諸国を旅して悪者をこらしめる物語は、明治期に大阪で人気を博した講談がルーツといわれる。写真/世界文化フォト



薬医門 旧本丸の水戸第一高校にある、水戸城唯一の建築遺構で、本丸から二の丸へ通じる橋詰御門（はしづめごもん）と推定されている。市内の祇園寺（ぎおんじ）に移築されていたが、1981年（昭和56）に現在地に移された。薬医門とは、屋根の棟木の位置を前後の中心からずらす形式で、この門は3間3戸（さんげんさんこ）、ふたつの脇扉が付く。写真/和田不二男
*史跡見学のさいには、学校敷地内であることを御留意下さい。



三の丸の空堀跡
旧三の丸の西端の外堀で、城内と町家を区画する役割をもっていた。現在、県立図書館・県三の丸庁舎の前に残る。水戸城は南北と東側は崖だが、西側は台地つづきのため、幾重（いくえ）にも堀がつくられた。写真/ファインフォトエイジェンシー

ながらも、地形をたくみに利用した縄張と部分的に残る大規模な空堀や土塁に、さすがは徳川御三家の居城という風格が感じられた。

残された美を訪ねて

水戸城をゆく

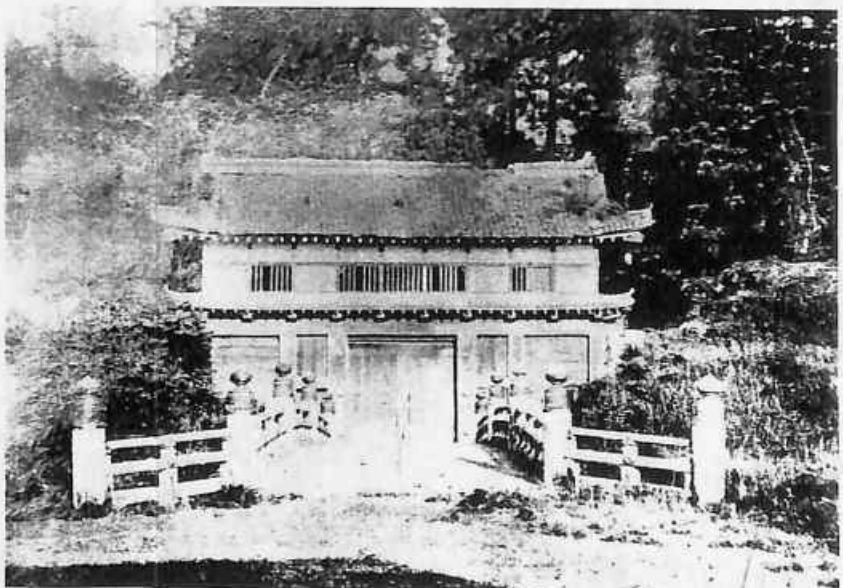
遺構の美

水戸城は、天然の要害である丘陵上に築かれた。大規模な堀と土塁が、御三家の風格をとどめ、かつては天守に代わる三階櫓がそびえていた。現在は、藩校「弘道館」に城の姿がしのばれる。



大手門跡
水戸城の大手は、徳川時代に佐竹時代の東側から西側に移された。大手橋の架かる堀の下は、いまは県道232号になっている。写真/預備員一

古写真 大手門
大手門は櫓門（やくらもん）で、内側は樹形になっていた。明治の廃城令でとり壊されている。このほか、水戸城の建築の多くは、廃城令と1945年（昭和20）の戦災によって失われた。写真提供/水戸市立博物館



を担っていたと考えられる。水郡線をまたぐ本城橋を渡って、旧本丸に入る。現在は水戸第一高校の敷地になっており、ここに水戸城の唯一の建築遺構である薬医門が移築されている。木割が大きく、重厚な外観で、その構造から、建造は佐竹氏時代（1591〜1602）にさかのぼると考えられている。

徳川御三家の風格

ふたたび本城橋をわたって西へすすむと、街路樹の美しい「水戸城跡通り」がまっすぐのび、道路の両側は小・中・高の各学校の敷地になっている。この一帯は、水戸城の政庁となっていた旧二の丸である。

市街地に城跡をめぐる

水戸駅北口をでて、JR水郡線に沿った道を上ると、やがて線路は雑草におおわれたV字型の崖の底へと入っていく。ここが、水戸城本丸の空堀の跡である。

水戸城は、低湿地帯に突きだした舌状の洪積台地上に築かれた。

かつては千波湖が水戸城の南側の崖を洗い、巨大な天然の水堀となっていた。千波湖に面した借楽園も、大名庭園という表向き顔とともに、いざという場合には出丸としての要塞の役割

水戸市立第二中学校の校庭には、戦国時代から自生していたという樹齢400年以上の「水戸城跡の大シイ」がおおきな木陰をつくっていた。

旧二の丸の西端まで歩いていけば、土塁によって大きな櫓形が設けられている。ここが大手門跡である。水戸城には、石垣がもとと築かれなかった。常陸国に石材が少なかったため、ともいわれている。

大手門跡には、復元された大手橋が架かっており、渡った正面に弘道館の門が威風をはなつて構えている。いまに伝わる水戸城の遺構は少ない

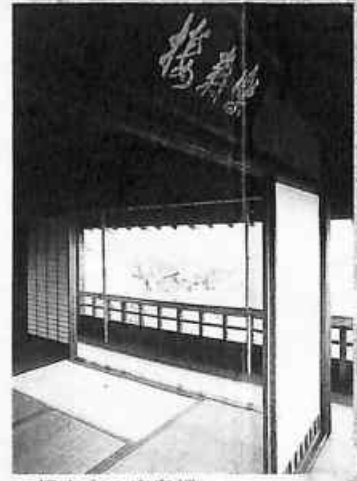
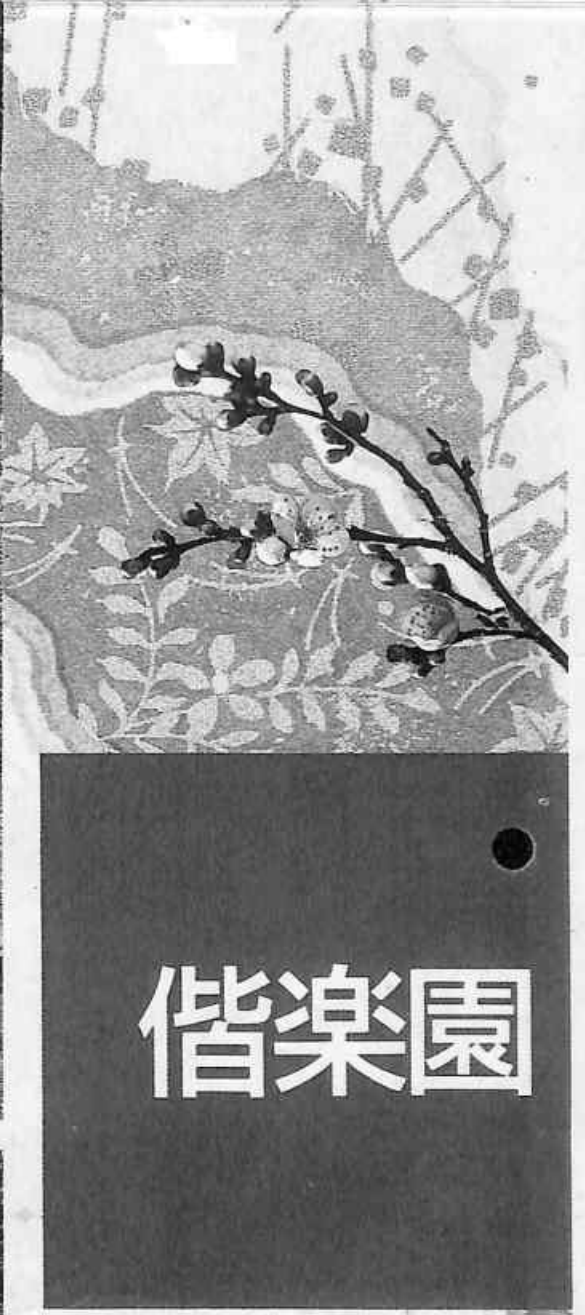
梅の公園として全国にその名が知られる偕楽園は、金沢の兼六園、岡山の後楽園と並ぶ日本三名園のひとつです。

水戸藩、第九代藩主・徳川斉昭公が天保13年(1842年)に造園したもので、その名が示すように、藩主のみの庭園ではなくすべての民と楽しむ(偕楽)という意から名づけられたといわれます。

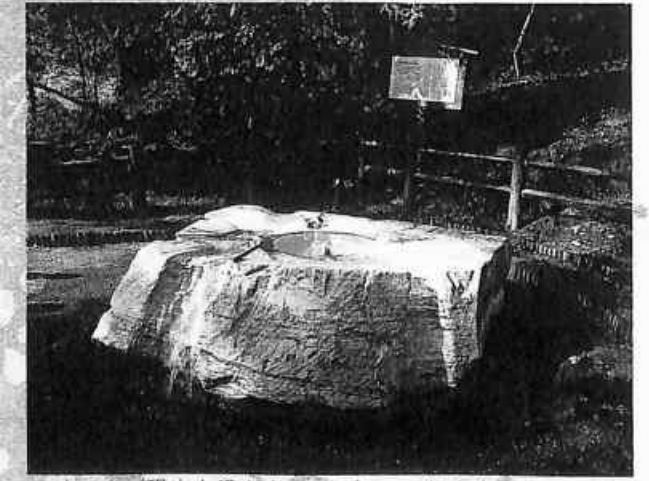
約13ヘクタールの園内には、約3,000品種に及ぶ梅林があり、春の訪れとともに、観梅の人々で賑わいます。また、初夏にはツツジ、秋にはハギの花が咲き誇り、シーズンを通して楽しめます。

公園の西側、杉林と竹林を背にした好文亭は、藩主の休憩や、文人墨客を招いて詩歌の会などに利用されたもので、質実な中にも風格が漂う建築です。3階の楽寿楼からは園内を見渡し、眼下に千波湖の眺望が広がります。

環境省選定の「かおり風景百選」に選ばれました。



▲好文亭の楽寿楼



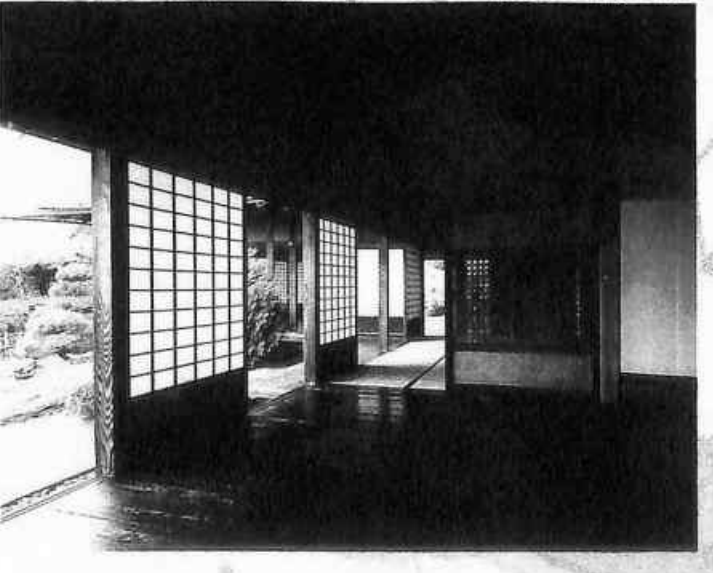
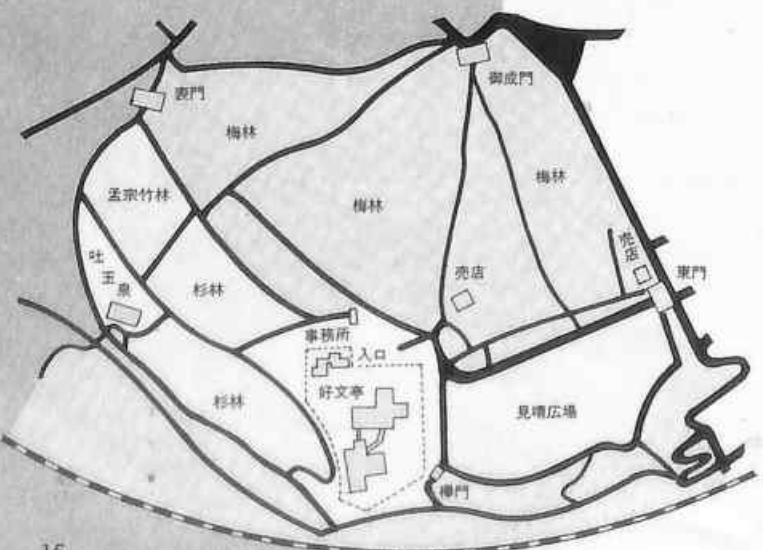
▲吐玉泉 (現在も湧き出ている) 好文亭の塗縁の間▼



▲つつじと好文亭 萩と好文亭▼



▲好文亭の表門 ▼梅と好文亭



- 1階 西塗縁の間
- 3階 楽寿楼
- 1階 東塗縁の間



▲正庁（国指定重要文化財）



▲正門（国指定重要文化財）



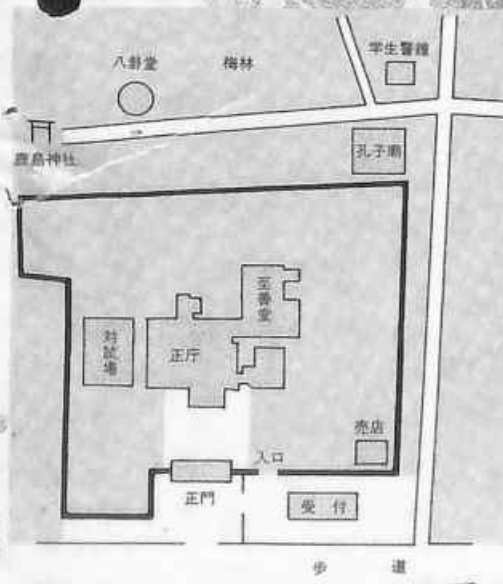
歴史ロードに面する弘道館▲

江戸時代最大の藩校として知られる弘道館は、水戸藩第九代藩主・徳川斉昭公により天保12年(1841年)に創設されました。

当時の水戸藩は、内外の困難を打開し、藩政改革のため人材の養成を重要政策とし、藩士の子弟教育を掲げて開校したものです。その建学精神と教育内容は「弘道館記」に記され、儒学と武芸はもとより、医学・数学・天文など諸藩に先駆けて多彩な教科が講じられました。また、弘道館は水戸学派の中心的存在として幕末の尊皇攘夷運動に大きな影響を与え、多くの指導的人物を輩出しました。

白土堀に囲まれた現存の建物のうち、災禍をまぬがれたのは正門・正庁・至善堂。この至善堂は明治維新の際、朝廷に大政を奉還した15代將軍徳川慶喜公が謹慎した一室で、その面影が偲ばれます。

弘道館



◀正庁の間
(藩主が出座する正席の間)

▼至善堂（藩主の座所と講学の場）



▲八卦堂（弘道館記の碑を収納）



水戸城

〔所在地〕

水戸市三の丸一〜三丁目

〔慶応三年時の城主〕

徳川中納言慶篤

〔家格〕城主

〔慶応三年時石高〕三十五万石

〔明治六年の存廃令〕存城



水戸城薬医門 祇園寺表門であったが、昭和60年本丸内に移築復元。

鎌倉時代初期に平国香の子孫である馬場資幹が、北側は那珂川、南側は千波湖と桜川に挟まれた低湿地に突出している洪積台地の東端に居館を築いたといわれる。建久四年（一一九三）資幹は源頼朝から多気義幹に代って常陸大掾職を与えられて、府中（石岡）に居を移し大掾氏を称するが、引き続き水戸の居館を保持。応永七年（一四〇〇）大掾高幹が城を修築したといわれる。同二十三年の上杉禪秀の乱に際し大掾高幹は禪秀方に加担したため、鎌倉公方足利持氏から所領を没収されて勢力を失い、同三十三年河和田城主で常陸守護時代の江戸通房は高幹の不在に乗じて城を奪取。江戸氏時代から地名を水戸とよぶ。

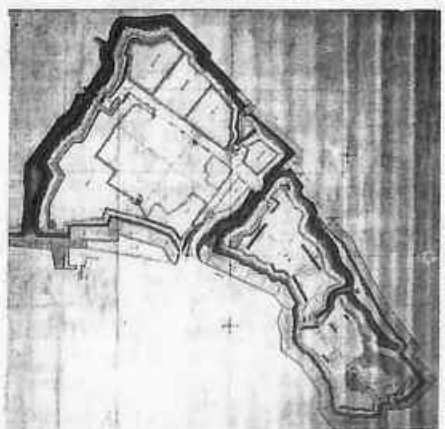
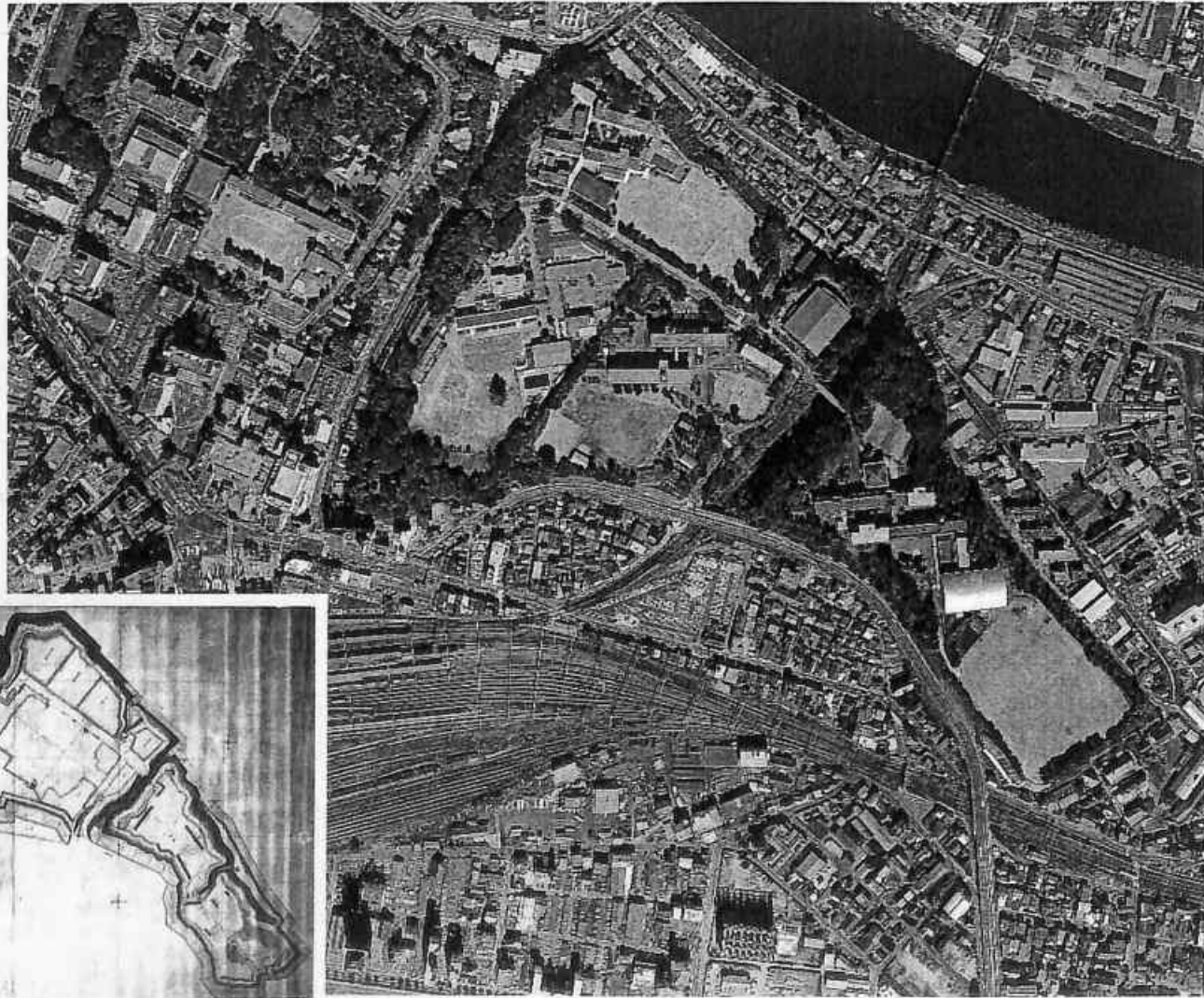
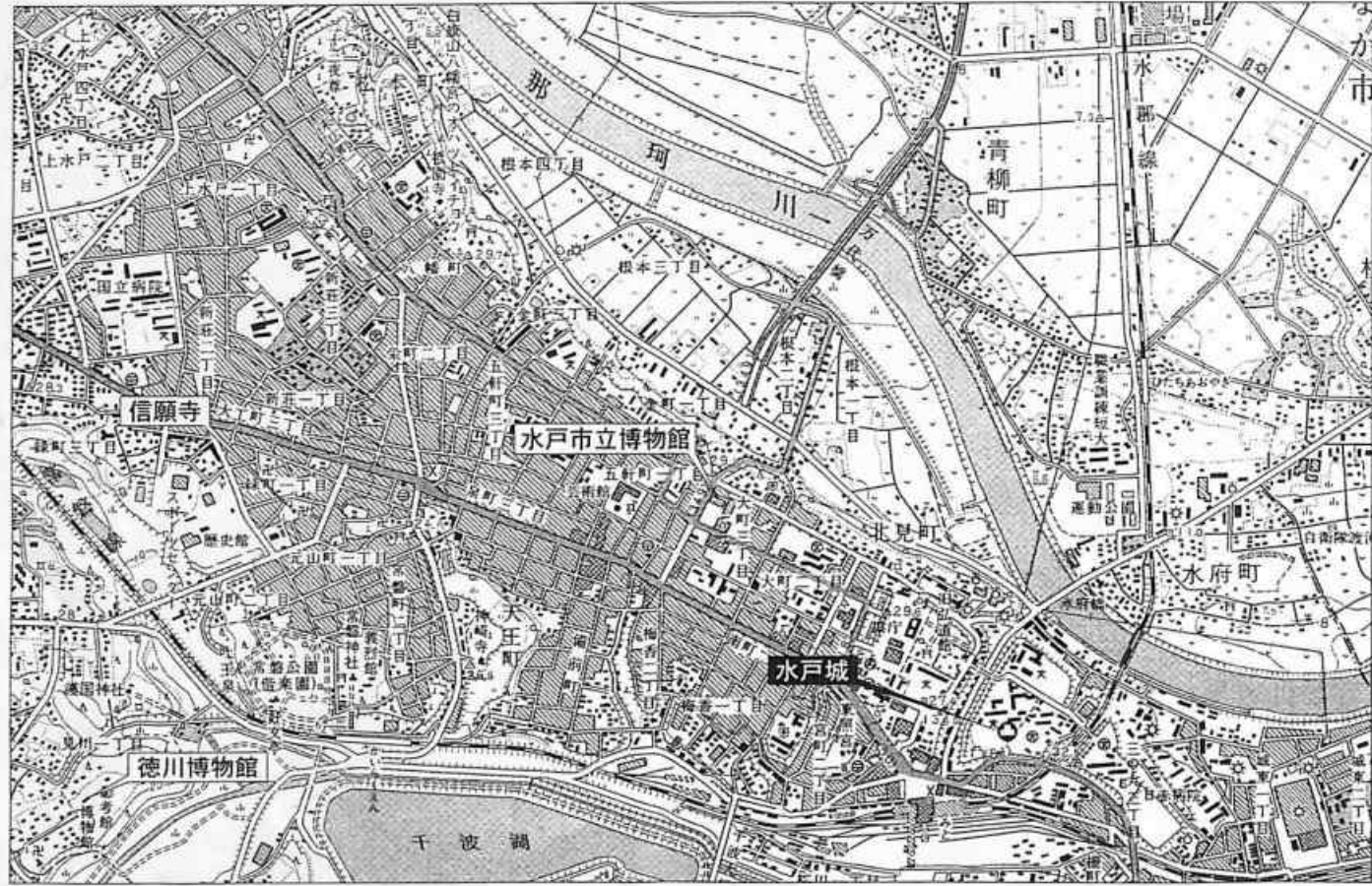
天正十八年（一五九〇）豊臣秀吉の小田原攻めに際し、秀吉から常陸支配を認められた佐竹義宣は、参陣しなかった江戸重通に水戸城の引き渡しを要求し、父義重と二手に別れて水戸城を攻略して太田城から移転。文禄元年（一五九二）から慶長七年（一六〇二）にかけて修築し、江戸氏時代の内城（居館の地）を本丸（古実城）とし、西側の宿城を二の丸として居館を築き、東端の浄光寺を城外に移転させて浄光寺曲輪（下の丸・東二の丸）を築き、大手を東側から西側に移し、本丸に橋詰門、二の丸に大手門、大手橋

を建設、西方に三の丸を築き、その西側に城下（上町）を設ける。

慶長七年佐竹氏の出羽秋田転封後、徳川家康の五男武田信吉（断絶）・十男徳川頼宣を経て、同十四年十一男徳川頼房が下妻から入封し、以後水戸徳川氏が在城。寛永二年（一六二五）から同十五年にかけて修築し、二の丸を本城として御殿、三階櫓（天守に相当）を造営。本丸に二重櫓二棟と武器等の板倉を建設、三の丸に重臣の屋敷を置き、その西方に三重の土塁と堀を築いて総曲輪を設け武家屋敷を配置する。東方の低湿地を埋め立て、一部を武家屋敷とし、他は上市の町人の大部分を移転させて下市をつくるなどして城下町を整備。元禄十一年（一六九八）『大日本史』編纂にあたる彰考館の分局

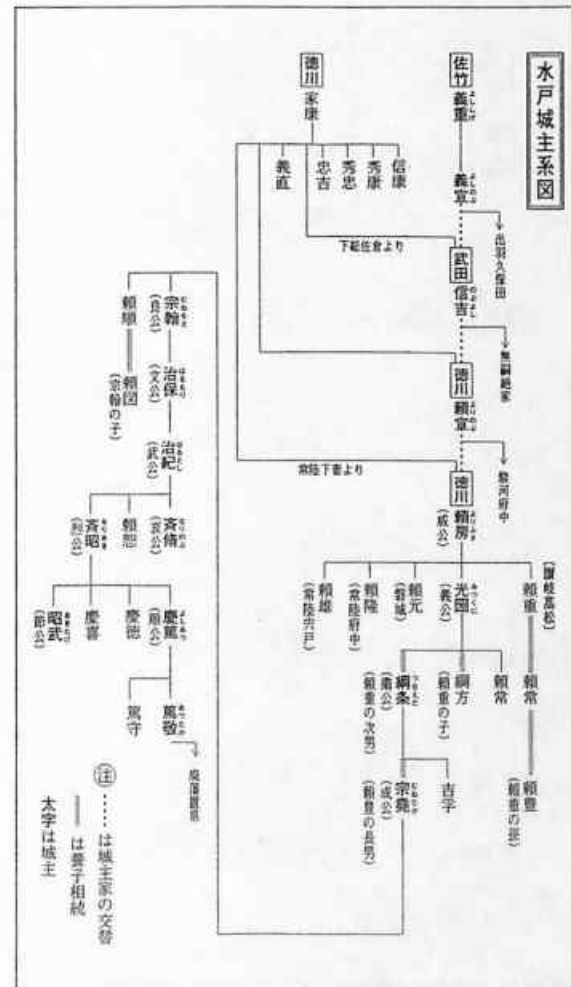
を二の丸に置く。明和元年（一七六四）失火により御殿、三階櫓を全焼し、同六年徳川治保が再築。天保十一年（一八四〇）徳川斉昭が三の丸に藩校弘道館の建設に着手し、翌十二年仮開館し、安政四年（一八五七）までに諸施設も完成し本開館式を挙げる。

明治元年四月十五日前將軍徳川慶喜が弘道館に入り、同年七月十九日まで謹慎生活を送る。同年九月二十九日市川三左衛門、朝比奈弥太郎の率いる諸生党（佐幕派）の脱走藩士は、旧募兵の一部とともに城の奪取を企てて市内に侵入し、十月一日城内に突入する。三の丸の弘道館を占拠し、二の丸に拠る藩兵と二昼夜にわたって対戦するが、松岡・守山藩兵の来援により十月二日夜敗走。その際、砲



〔水戸城実測図〕

真上から見た水戸城

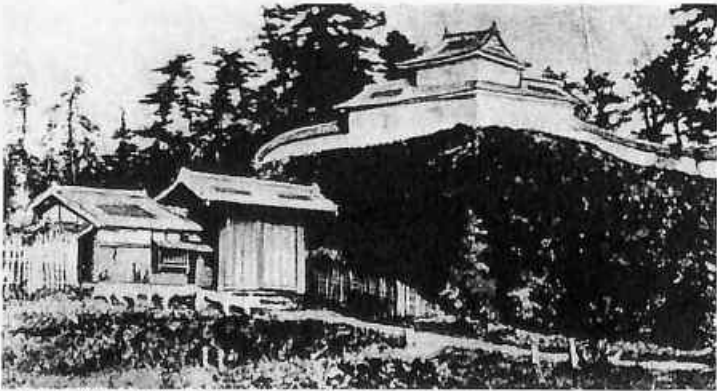




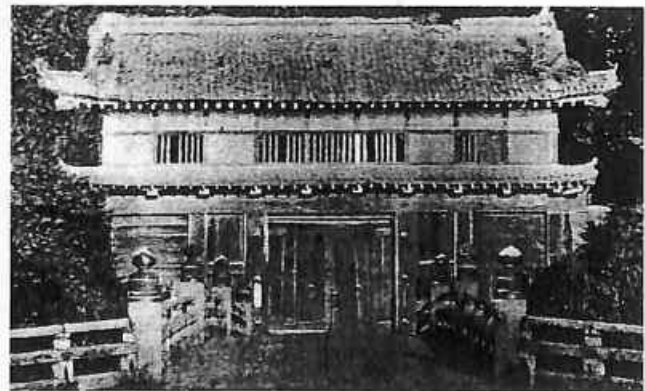
▲南から見た二の丸(左)と本丸(右) 左に見えるのが三階櫓。右に見えるのが本丸二重櫓。



㊦二の丸三階櫓 戦災で焼失。



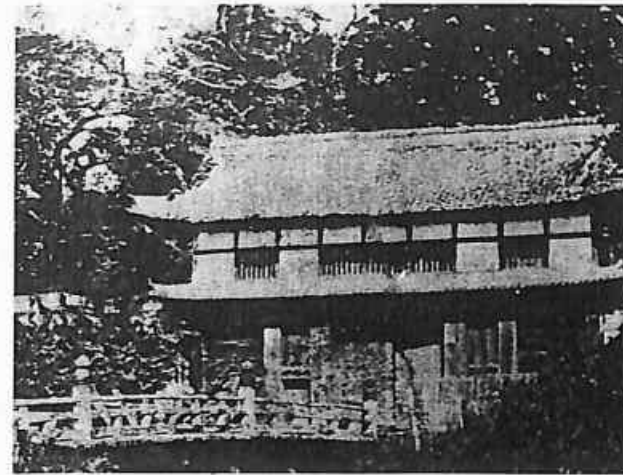
㊧本丸隅櫓と柵町坂門 隅櫓は手書きによる加筆が著しい。



㊨二の丸大手門正面

撃により弘道館の文館・武館・医学館を焼失。同四年七月水戸県庁を弘道館に置くが、同年十一月茨城県に合併。同年十月御殿向きおよび各所の柵と門を取り崩す。同五年一月県庁を引続き弘道館に置く。同年七月城内に東京鎮台第四分営を置き歩兵二小隊を派遣。同月二十一日大蔵大丞渡辺清が県令心得として着任するが、同月二十六日三階櫓を除く二の丸の大半を焼失。他藩出身者が県令として来県したことによる不平等な旧藩士の放火といわれ、士族数十名が逮捕され取り調べられるが、証拠不十分で釈放となる。同年十二月旧藩校弘道館を閉鎖。同六年一月存城となり第一軍管に属し、宇都宮営所支営となる。同年七月柵町南見付、北見付、曲堀見付を取り払う。同年十一月水戸表静謐を理由に宇都宮営所支営を廃止し、駐屯の歩兵二小隊は宇都宮営所に移転。同十四年三月陸軍省から内務省に移管し、弘道館敷地の一部を県庁敷地に充て、残地を水戸公園とする。同十五年五月三の丸の弘道館調練跡地に茨城県庁庁舎を建設し移転。同十七年の下市の大火、同十九年の上市の大火による市区改正により総曲輪の土塁は取り崩されて、堀も埋め立てられる。廃藩後、焼失を免れた大手門等は三階櫓を除き取り壊されるが、本丸橋詰門は同二十年頃県令官舎の

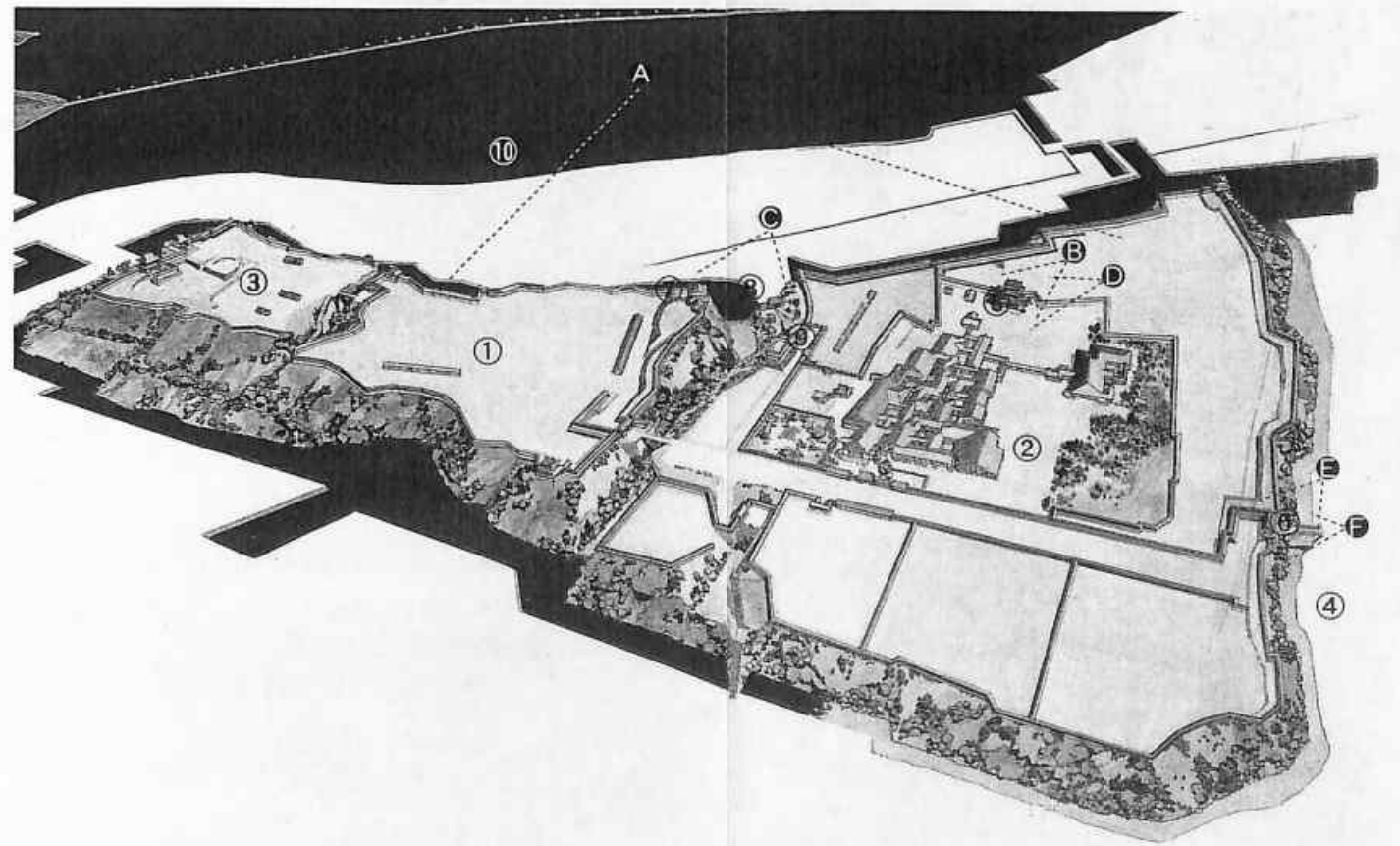
古写真で見る幕末の水戸城



㊩二の丸大手門



㊪二の丸三階櫓 実質的には天守に相当した。



水戸城復元図 (C)復元 阿久津久・鈴木賢次/画 谷井達三

- ①本丸 ③東二の丸 ⑤三階櫓 ⑦隅櫓 ⑨柵町口門
- ②二の丸 ④三の丸 ⑥大手門 ⑧柵町坂門 ⑩千波湖

水戸の基礎を築いた 水戸徳川家

尾張・紀伊両家とならび、徳川御三家のひとつ水戸徳川家。家康の十一男頼房公を初代藩主とし、二十五万石（後三十五万石となる）、三位中納言の官位を与えられた。また、定府と称して江戸常住となり参勤交代が免除されるなど、將軍の補佐役藩として信頼を確立した。

また、文教を重んじた水戸藩では、光圀公編さんの『大日本史』を基に、独自の学派「水戸学」が形成され、幕末の思想に大きな影響を与えた。



1628年～1700年



晩年を過ごした西山荘

34歳で第二代水戸藩主となった光圀公は、庶民が深刻な給水難に苦しんでいるのを知るや、当時としては最高の技術水準を誇る笠原水道を敷設。また、寺社の移転と整理、家臣の共同墓地の設置、和紙の専売実施など多くの改革に取り組み、藩内外から名君と仰がれた。

さらに、はるか北方の蝦夷地と交易するために巨船「快風丸」を建造するなど、いち早く未来を見据えてもいた。そして、史記にならって「大日本史」の編纂を始め、代々の藩主に受け継がれ明治39年に完結。編纂に携わった学者のうち佐々介三郎と安積覚兵衛は「助さん、格さん」のモデルといわれる。



1800年～1860年



「民と備に楽しむ」場所として開園した備楽園

30歳で第九代水戸藩主となった斉昭公は、藤田東湖ら中・下士層の藩士を積極的に登用し藩政改革に着手し、幕府の天保の改革にも示唆を与えた。また、弘道館創設や偕楽園の造園に情熱を傾ける一方、異国船の侵入に備えて蝦夷開拓の計画を幕府に訴えるなど斬新的な藩主であった。

1853年ペリー来航という大事件が起き、かつてない厳しい外交政策を迫られた幕府は、斉昭を海防参与に抜擢。しかし、日米修好通商条約をめぐる井伊大老と対立し、「安政の大獄」の拡大により水戸城に永蟄居を命ぜられたまま、城中で61歳の生涯を閉じた。



1837年～1913年



幼少時代に学んだ弘道館

斉昭公の第7子として江戸小石川の水戸藩邸で誕生。幼いうちに水戸に移され、5歳から水戸弘道館で武芸や学問を厳しく受けた。11歳の時、御三卿である一橋家の養子となった。安政の大獄、桜田門外の変の後、尊王攘夷の機運が高まり、さまざまな政治的思惑が交錯し、政治の中心が京都に移る。朝廷の勅定により、將軍後見職、禁裏御守衛総督を歴任し、30歳で徳川第十五代將軍となった。

大政奉還により、「最後の將軍」といわれ、江戸から明治へ、鎖国から開国へと時代の大転換を遂げた。

水戸の 三名君

水戸徳川家歴代藩主

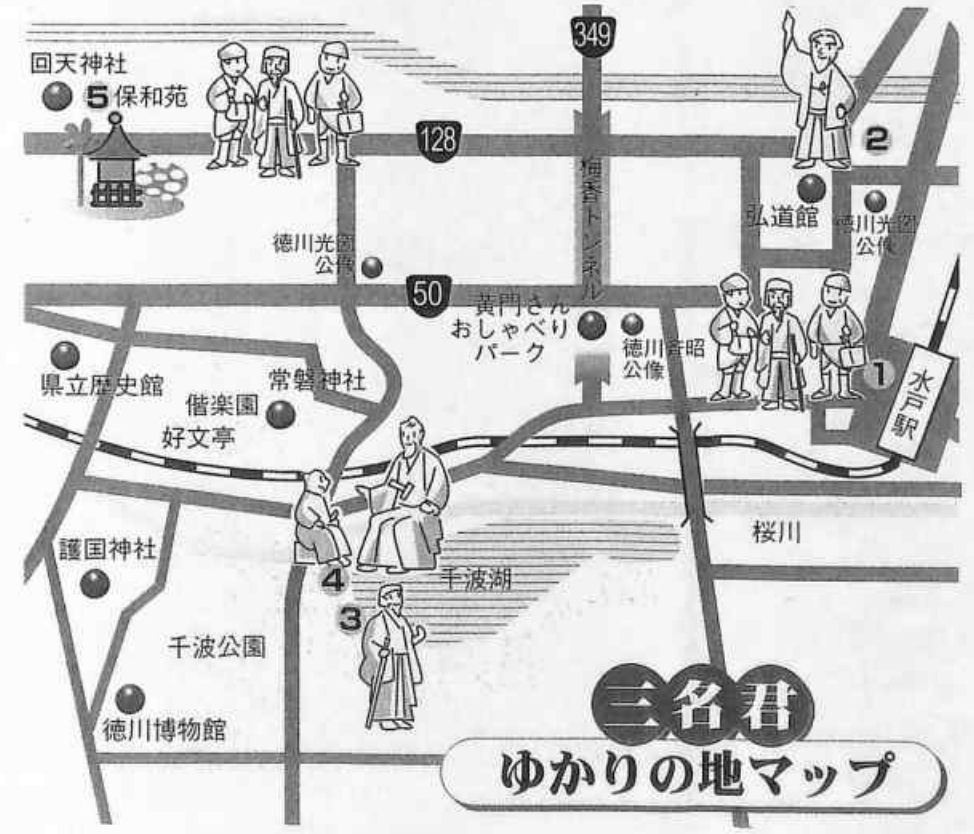
徳川幕府第1代將軍 家康 (いえやす)

- 第1代 頼房 (よりふさ)
- 第2代 光圀 (みつくに)
- 第3代 綱條 (つなえだ)
- 第4代 宗堯 (むねたか)
- 第5代 宗翰 (むねもと)
- 第6代 治保 (はるもり)
- 第7代 治紀 (はるとし)
- 第8代 斉脩 (なりのぶ)
- 第9代 斉昭 (なりあき)
- 第10代 慶篤 (よしあつ)
- 第11代 昭武 (あきたけ)

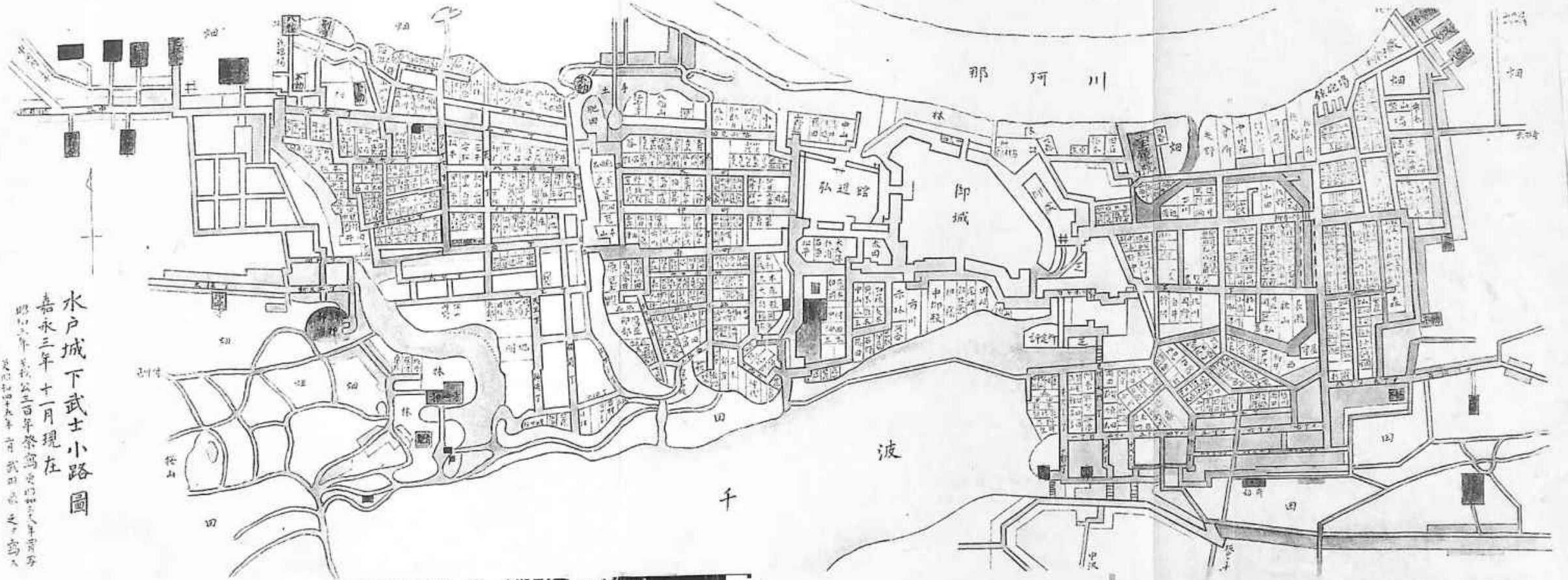
徳川幕府第15代將軍 慶喜 (よしのぶ)

門として移築され、さらに昭和十七年祇園寺表門として移築。
明治二十一年五月茨城県尋常師範学校（のち茨城師範学校）の新校舎が二の丸に完成し移転。同二十五年十一月水戸公園を水戸市に移管。同二十八年公園敷地の一部を割いて南側馬場に水戸市高等学校（現市立三の丸小学校）の校舎を建設。同二十九年九月茨城県尋常中学校（のち県立水戸中学校、現県立水戸第一高校）の新校舎が本丸に完成し移転。大正九年四月水戸公園を茨城県に移管。同十一年三月弘道館を国史跡に指定。昭和十八年三月茨城師範学校男子部付属小学校（現茨城大学教育学部付属小学校）を二の丸に開校。同二十年八月二日戦災により三階櫓、弘道館の孔子廟、八卦堂、鹿島神社焼失。同二十三年三月水戸公園は特別都市計画公園に指定され、弘道館公園と改称。同二十四年四月市立第二中学校を二の丸に開校。同年五月学制改革により、茨城師範学校等を母体とする茨城大学が発足。同年八月県立水戸第三高校を二の丸に移転。同二十七年三月弘道館を特別史跡に指定。同二十八年十一月弘道館八卦堂を再建。同三十八年弘道館正門・正庁・至善堂等の保存修理工事ならびに一部復元工事が完了。同三十九年五月正門、正庁、至善堂を重要文化財に指定。同四十二年十一月城跡を県史跡に指定。同四十五年十一月弘道館孔子廟を再建。同五十六年十二月祇園寺表門となっていた橋詰門を本丸に移築復元。平成五年大手門跡の発掘調査を実施。

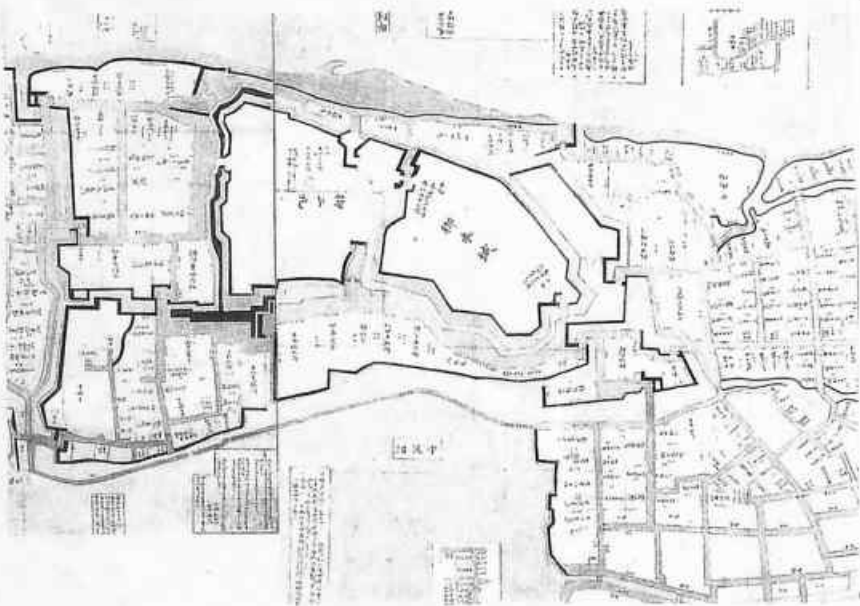
●現況
城跡は県史跡。本丸は水戸第一高校敷地、浄光寺曲輪（下の丸・東二の丸）は同校運動場。二の丸は茨城大学教育学部付属小学校、県立水戸第三高校、市立第二中学校の各敷地。三の丸は茨城県庁、同県警察本部、県立図書館等の敷地、弘道館公園、市立三の丸小学校の敷地、総曲輪は市街地となる。三の丸と二の丸間の空堀は国道六号線、二の丸と本丸間の空堀はJR水郡線・太田線の線路敷となるなど、変貌しているところも多い。三の丸西側の土塁・空堀、二の丸大手門の枳形、土塁、本丸の土塁等はよく残り、弘道館の正門・正庁（学校御殿）・至善堂等が現存し、特別史跡・重要文化財に指定され、橋詰門（薬医門・県文化財）も旧位置に近い本丸内に移築復元されるなど、整備も進められている。近年大手門の建て替えに伴い大手門の復元が検討されたが、資料が乏しいことや跡地が道路として使用されていることなどの問題があり、断念された。



日本史の舞台で活躍し、歴史を語る水戸徳川の三名君の像が、ゆかりの地に設置されています。そこは、歴史的・文化的遺産の場所であり、市民の憩いのエリアとして親しまれ、往時を偲ぶ散策の観光スポットです。



水戸城下武士小路圖
 嘉永三年十一月現在
 昭和三年三月廿五日現在
 昭和十四年三月廿五日現在



三階櫓



橋詰門

古写真 三階櫓
 徳川氏が城主になると、手狭な本丸は武器倉庫に使われ、二の丸が実質的な本丸になった。二の丸には藩主の居館があり、天守に相当する海鼠(なまこ)壁の美しい三階櫓(内部5階)が建てられていた。1945年(昭和20)の戦災で、惜しくも焼失する。写真提供/水戸市立博物館



水戸城外観

尾